
kaleidoscope×landscape ～坂の上の魔法使い～

深月織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

kaleidoscope×landscape 坂の上の魔法使い

【Nコード】

N0318H

【作者名】

深月織

【あらすじ】

とあるウワサ話がある坂の上のお屋敷に、深夜忍び込んだオレ。そこで出会ったのは、ラピスラズリの魔法使い――。

1. 真夜中の冒険者

——坂の上のオバケ屋敷に咲く百合の花に願い事をする、それは必ず叶う——

いつからか、オレたちが住む街にささやかれていた、そんなウワサ話。

嘘っぱちだとわかっていても、
気休めだとわかっていても、
そんなおとぎ話を信じたいときだって、あるんだ——。

ガシャン、と錆び付いた門が軋んだ音を闇夜に響かせて、オレの心臓が跳ねる。

深夜二時。

住宅街から少し離れたこの辺りは、街灯もまばらで暗闇に沈み、ちよつと異界に來たような気分になる。

門に足をかけその上に乗り上げたオレは、なるべく音を立てないように一気に飛び降りた。

オバケ屋敷の中へ。

石畳を雑草が覆い隠した場所へ着地したオレは、背中のリュックに入った荷物を気遣いながら、グルリと辺りを見回す。

へたするとオレの身体まで覆い隠すように鬱蒼と茂った草をかき分け、具合が良い場所を探す。

きつと以前は手入れの行き届いた庭だったんだろう、今は見る影もないそのジャングルに懷中電灯を照らして、奥へと進んだ。

ザワリと樹々を揺らし、冷たい風がオレの頬を撫で。

月が雲に隠れ、辺りを照らすのはオレの持つ小さな懷中電灯の頼りない灯りだけ。

こういうときに限って、思い出してしまう。

この屋敷にまつわる、もうひとつの噂話を――

『――お母さんが子供の頃、あの家には親を亡くした女の子が、たった一人で住んでいたんだって……』

『――ただどある日、その子はコッゼンと、本当に突然、姿が見えなくなったの……』

『――さっきまでそこにいた様子なのに……』

――生活用品も、家具も、私物もそのまま……』

『――まるで神隠しみたいに、気付けば女の子だけ、最初から居なかったみたいに、消えちゃって……』

『――それ以来、ときどき、白い影が窓に写ったり、庭をさ迷い歩く人影を見た人がいるんだって……』

（だああああっ！　なんで今思い出すっ！？　失踪って単にそれ

誰かに引き取られたんじゃないのか！ 人影って肝試しやってるやつとか！）

ぶるぶると頭を振ってクラスの女子の声を払い落とし、オレは改めて前を向いた。

この家が無人になったのは、確かに二十年ほど前のことだ。

真相がどうであれ、主をなくした屋敷は売りに出されることもなく、代わりに誰かが住むわけでもなく、ただ荒れ果てるに任された。年代物の洋館を囲んで植えられた草木は生い茂り、次第に屋敷の姿を隠していく。

周りと比較しても異様なくらい伸びゆく植物たち。

そうしていつしかここはオバケ屋敷と言われるようになったのだ。

だけど何故、ここに咲く百合の花が願い事を叶えると言われるようになったのかは知らない。

そんなことはどうでもいい。

ただ、アイツの助けになるのなら――、

開けた一角に出る。

ライトを地面に向け来た道を振り返り、ここなら丁度良いかとしやがみ込んだ。

背負っていたリュックを下ろし、中から荷物を出そうと手をかけ――視界の端に写った光に、ギョツとする。

オレの懷中電灯の明かりは地面に向き、庭を照らしている。

気付いた光は――屋敷の中からのもので。

泥棒？

不審者？

それとも——まさか、ウワサの。

大きな一枚ガラスの向こう側で、チラチラと光が踊る。
硬直したまま呆然とその光景を見つめる俺の目の前で、

その光は細やかな、揺れては消える蛍火から、
だんだんと花火のように輝きを増すものに変化してゆき——、

突然の弾けるような圧力と目が眩む白い光に包まれ、オレは強く
瞼を閉じた。

2. 光より現れる

——オレが行く。お前はあいつを連れ出してきて。

——大丈夫か、一人で？

——任せとけっつの。

（あああああやっぱりあんな強がり言うんじゃないなかった——！

出たっ、出え——たあ——ッ！！）

ギウウと瞑^{つむ}った瞼の向こう側から光が消えるまで、あとから考
えると、ほんのわずかな時間しかたっていないなかったと思う。

オレには、永い永い時だったけれど。

眠りを覚ますように響く発光はしかし誰にも気付かれることなく
まるで何もなかったかのように辺りは再び暗闇に包まれて、静か
なる。

草の上に尻餅を着いていたオレはそろりと目を開けた。

——そして。

窓ガラス一枚隔てた向こうに、オレは燐光をまとった人影を見つ
けたのだ——。

チラチラと光が踊る。その淡い光が幽霊の輪郭を浮き上がらせていた。

ウワサの、消えた少女ではない。

全然違う。

だって男だし。

大学生くらいのお兄さん？

たがしかし。

加減によっては藍色に見えるウェーブがかかった暗い髪、瞳の色はここからじゃよく分からないけれど、クラスの乙女共が黄声を上げて飛びかかるような綺麗な顔をしている。

何よりオレの眉をひそめさせたのは、その風体。

片手に持つのは身の丈ほどの長い棒、着ているのは裾を引きずるような上着——アレだ、歴史映画とかファンタジーなお話で見る……マント？　ローブって言うのか？　そんな衣装っぽい。

……コスプレイヤーの幽霊？

彼はふうやレやレといった風に中に着ている立て襟の首もとを引っ張り息を吐いた。

その顔が、ふとこちらを向いて——

モンタージュが作れるくらいじっくりハッキリ彼を観察していたオレと、

バッチリ、視線が合った。

ラピスラズリ。

従姉妹が好きで集めている石のような色の瞳と、不審に満ち満ちたオレの瞳が交差して。

呆氣に取られてパクリ、と開かれた口が音を作るより早く。

オレは脱兎の如くその場から逃げ出した。

この時ばかりは伸びきった草に感謝したね。クラスで前から何番目と言うみみっちい身長のオレを上手く隠してくれる。

方向感覚がおかしくなりそうだけど、塀が高いからサイアク壁をつたって行けば門に辿り着くだろう。

明日のことを考えて、あまり奥には入り込んでいないはずだし……、

逃げつつもどこか冷静にそんなことを考えていたオレだったけれど、門が見えた、と思った瞬間――

『　　、――！』

聞き取れない音の流れが耳に飛び込んで。

ざあつ、とオレを隠してくれていた草木が揺れ、“縮んだ”。

……は……？

まるで図ったように雲が流れ、月が顔を見せる。

望月。

街灯より明るく地上を照らすやわらかい光は、その場に立ち竦むオレの姿を顕にする。

ザリ、土を踏む音と背後に人の気配。

……て、足音？

コイツ足があるのか幽霊のくせに。
というか。

幽霊ではなく――

『巻いて捕らえろ緑の鎖』

今度は音だけでなく“言葉”が届いた。

正確に言うなら、さっきと同じ判らない音の羅列だったんだけど――その言葉に込められた“オレを捕まえようとしている意思”を感じたのだ。

まさに反射。

金縛っていた身体が跳ねるように動き、オレはあと数歩の距離にある門に向かってダッシュ。

渡里小体操部エースの技を見よ！ と、バネだけで門に取り付いたままではよかったが、

『あ、』

どこか間の抜けた男の声と同時に、スニーカーを履いた足に何かが巻き付くを感じて――身体が引っ張られた。重力にしたがって落ちる、オレに巻き付く緑。地面に落下した衝撃はそれが吸収してくれた。

けれど、

バウンドして跳ねた瞬間。

運悪く、オレは頭を固いものにぶつけた、らしい。

――暗転。

3. 怪しくないわけがないし

……しいちゃん、今までありがとね…

——なに言ってるの？

……がんばりたかったけど、ダメみたい…。なんか、イヤになっちゃった…

——バカ言うな！ 手術受けるんだろ、今度で最後だろ！

……っだって、20パーセントなんだよ？ ムリだよ…っ、

——諦めんな。

——諦めたら、全部、そこで終わりなんだ——…

「いッてえエエッ!!」

後頭部に刺すような痛みが走ってオレは悲鳴を上げた。
頭を両手で抱えて転がり回る。

「あああああッッ」

「え、えーと、だいじょうぶ？」

「大丈夫に見えるかアッ！」

空気を読まないのんびりした声に条件反射で怒鳴り返してから、ハッとした。

――？

――……えーと。

「あ、ちよつと？」

「ぎゃああああッはなせへんしつしゃああああッ！！！」

頭のタンコブが出来た原因、気を失う以前のことを思い出し、再び逃げ出そうとしたオレをすかさず男が捕まえる。

パーカーのフードをひっ掴まれジタバタもがく。

が、「大人しくしてくれないとまた縛るよー？」などとあくまでもトボケた声音で告げられ、余計危険を感じた。

取りあえず暴れるのは止め、寝かされていたらしいソファの後ろに隠れるようにして男と距離を取る。

「毛を逆立てた小動物みたいだなあ…、ちよつと落ち着こう、怪しいものじゃありません。安心してー」

言いながら、今は何も持っていない手をヒラヒラさせて、無害をアピールする、ヤツ。

「なに言ってやがるアヤシさ大爆発だっつーの！」

ピカッと光って何処からともなく現れて変な手品使って人をぐるぐる巻きにしよってからに！

これがアヤシくないつつうんなら、なにがアヤシいんだ!!

「ごもつともですが、それを言うなら君だって怪しいんじゃない？
こっちの世界では子供がウロウロしていい時間なのかな」

ぎくり。

不審者に真っ当なこと言われたー!

その辺りを追求されると確かにヤバイんだけど。

「しかも他人の家の庭先につて、不法侵入？　だよねー、バレたら
マズイのは君もでしょ？」

にこにこしたままスルドク指摘してくる男を睨む。

「……不法侵入はあんたもだろ」

我ながら勢い弱えと思いつつ、説得力ない反論をすると、キョト
ン、と首を傾げる男。

「不法侵入じゃないよー。だって、ここ、僕の母の家だし」

……はあー？

言うに事欠いてそれか。

おかーさん家だとう？

オレが子供だと思ってナメてんな、この家が20年間空き家だっ
つーのはここいらじゃ幼稚園児だって知ってるんだよ。

元の住人である母子家庭のお母さんが亡くなったのは見た感じ二
十歳^{タチ}前のアンタが生まれるよりもっと前だし、消えた子供は女だっ
た。

故に、それがアンタではないことはハッキリしてる。

嘘つくならもうちょつと下調べしてからにしろ。

「君、うちの弟とあまり変わらない歳なのにしっかりしてるなあ。いや、リユーが頭悪すぎるのか…。」

ああ、だからね、その消えたって言われてる女の子が、僕の母。」

ハイ？

おんなのこがおかあさん？

やっぱり神隠しなんかじゃないじゃんよ単に嫁に行っただけ、アレ？ でも行方不明当時うちの両親たちと変わらない年齢だったはずウワサ話のニュアンスじゃそんな感じだったぞ？ 中学生嫁に行くには早くないか昔の話だからそんなこともないのか、

わずかな間に余計なことを考えてしまうのはオレの悪いクセだ。男の言葉の真偽をそうやって脳内で検証していたりするオレには気付かず、彼はエヘンと胸を張った。

「だから僕は君を警吏…ええと、お巡りさん？ に、突き出す権利があるわけです！」

…お巡りがいたいけな小学生とコスプレ外人のどっちを信じるか試してみようか。

ジトリと疑わしげに見つめるオレの冷めた視線に、「やりにくいなあ、ホントに君、見た通りの年齢なの？」と訳のわからんことを呟いたあと、彼は気を取り直したように微笑み、疑問を投げ掛けてきた。

「で、君は庭で何をしていたのかな？」

思考が停止する。

「っ……！　いま何時…、オレの荷物は……っ！？」

真っ青になったオレの勢いに怯みつつ、男は隅に避けてあったりユックを指した。

オレは飛び付いて、ブルブル震えてうまく動かない指先でジッパ―を開ける。

封を開けたとたん解放されて強くその場に立ち込めた香りは、まるで断末魔のようだった。

——っ……！！

「え、ちょ、ちょっとどうしたのッ！？　なに、何が……」

うろたえる男の声が耳に入ったけれど、オレはそれに答える余裕がなかった。

——振り回したり、オレと一緒にぐるぐる巻きになったり、挙げ句高いところから落ちたオレの下敷きにでもなったのか、大事に中に入れていたそれは、

ペシャンコに潰れていたり、

半ばから千切れていたり、

美しかった面影は見るよしもなく、無惨な姿に変わり果てていた。

「……っしょ…、も、買いにいくお金も…、店開いてないしっ……」

床にぺたりと座り込み、それを見つめたまま蛇口が壊れたみたい
に目から水を落とすオレの頭を男が撫でる。

オロオロしながら、訳もわからないのに、慰めるように。

「ええと……泣かないでー、どういふことなのかな、これ……百合、
の、花だよな？　どうしてカバンの中に……」

——どうしよう。

——どうしよう。

約束の時間まであと少し。

——間に合わない。

ごめん、イツキ、ユイカ——……！

4. 魔法使いとオレ

——幼なじみのユイカは、生まれつき身体が弱くて。

オレと、もう一人の幼なじみであるイツキは彼女を守るようにしながら、ずっと一緒にいた。

そんな三人組から、微妙に違う関係になったのは最近のこと。

オレは少し寂しい気持ちを持ちつつ、二人が笑ってるならそれでいいやと、淡く抱いていた想いを封印した。

でも。

ある日目の前でユイカが倒れて、オレたちは笑っていられない状況を知ることになったんだ——

「心臓の、難しい手術を受けなきゃいけないんだ、そうしたら助かるんだ。でも、確率は20パーセント。」

ユイカは今までに繰り返し返されてた手術や入院生活に、体力と気力が無くなってしまっていて……受ける前から諦めようとしてる。だから、」

おとぎ話でもいい。

それでアイツが助かるなら。

願いは叶うと、思うことが出来るのなら。

そう思って、なんの力もない子どものオレたちに出来ることをしよう、ここへ来た。

――坂の上のオバケ屋敷に咲く百合の花に願い事をする、それは必ず叶う――

いつからか、オレたちが住む街にささやかれていた、そんなウワサ話。

嘘っぱちでもいい。

気休めだだってかまわない。

ユイカが、少しでも手術の成功を信じる事が出来るなら。

この季節、百合の花が咲いていないことはわかった。

だから、小遣いはたいて花屋で切り花を調達して、ユイカがここに来る間だけでいいから、咲いてるように見せかけて――願い事を。

オレは気付かれないよう花を用意する役。

イツキは、ユイカをここまで連れてくる役。

きつと、成功させるって、思ってたのに。

変質者、もといおにーさんに、テンパってしまったオレは泣きじやくりながらそういったことを説明したんだと思う。

思うっていうのは、よく覚えてないからだ。

おにーさんが困りながらも慰めるように頭を撫でてくれていたのはなんとなく覚えてる。

さつきチラッと弟がいるって話してたし、おんなじ扱いされてるんだろうな。

不審人物だけど、いい人なのかもしれない。超不審だけど。

リュックの中でぐちゃぐちゃになった百合の残骸を前に、ひとしきり泣いて落ち着いたオレは、パーカーの袖で顔をぐいぐい擦ったあと、気合いを入れて立ち上がった。

時間、無駄にしまった。

諦めんかって言ったオレが諦めるわけにはいかない。

立ち上がったオレを静かに見つめてたおにーさんが端的に訊ねてきた。

「……どうするの？」

「花、探しにいく。約束の時間は明け方だから、それまでにゼツテエ見つける」

あるとすれば、山だ。

オレが用意したのは分かりやすく白い百合だったけど、もう、なんでもいい。百合の形してりゃあいんだ。ヤマユリでもオニユリでも、根性で見つけてやる。

「無茶だなあ……こっちの世界の子はみんなそうなの？」

呆れたように言ったおにーさんを睨もうとして振り返った。

呑気に言ってるな、半分の責任はあんたにもあるんだぞ！ と。

——だけど、“の”の形に開けた口から音は出ることはなかった。

ふうわりと。

おにーさんが微笑んでいた。

その笑顔はこちらが戸惑うくらいやわらかく優しげで、綺麗、だったから。

思わず、見とれてしまった。

「無茶な子はキライじゃない。

百合をダメにしたのは僕のせいでもあるし——このまま見過ごしたら、お祖母様に叱られそうだ。

なんたって、“百合”だものね」

と、クスクス笑いながら意味不明なことを言って、立ち上がる。首が痛くなるくらい上にあるその顔を見上げて、オレは訊いた。

「探すの、手伝ってくれるのか」

「いやいや」

片眉を上げて、否定し——脇に立て掛けていた棒を手取る。

なんだよ、手伝わねーならまぎらわしいこと言うな。

だが、ぷんとそっぽを向いて出ていこうとした背に続けられた言葉が、オレの足を止めた。

「もっと手っ取り早い方法がある。

——咲かせてあげよう。

願いを叶える、百合の花を——」

そんなことが出来るのかと、疑わしく見返すと、彼は宇宙色の瞳を自信満々に輝かせ。

おや、君はもう知っていると思っていたけどね？　と、笑いながら。

「――僕は、魔法使だよ――？」

細かな装飾が施された杖を、手の中でくるりと回した。

5. 魔法

自分のことを魔法使いなんだよ、なんて言っちゃうの、実際にいたら痛いヤツだ、いつものオレなら思っただろう。

だけど、オレはそれが真実だほんとうのことと知っている。

そう思わざるをえない現象をコイツは起こしてるんだから。

オバケ屋敷が魔法使いん家が変わったところで別にオレに支障はない。

おにーさんは今までオレたちがいた部屋の、外に面したガラス窓を開けて、庭に出た。

手には杖と、可哀想なことになった百合の残骸。

手招きされたオレも、続く。

「……こつちでの力の使い方が微妙に調節利かないんだけどね……まあ、半減してるから大丈夫でしょ」

と、何だか怪しいことを言っ、右手に持った杖で地面を叩く。

トン、トン、トン、

リズムを刻むように。

そのうち、オレはあることに気付いた。

ボンヤリと。

仄かに、淡く、おにーさんの身体が燐光を放ち出す。

おにーさんが現れた時みたいに。

ふわあつ、とその光は敷地内全体に拡がって――、おにーさんが杖の先をクルリと回した瞬間、ふっと消えた。

ぱちぱち瞬いたオレは、ナニ今のナニ？　と疑問の眼差しをおにーさんに向ける。

「僕の力に馴染ませたんだよ。ここに弾かれちゃうと困るしね。――さっきも、ごめんね？　あんなに利いちゃうとは思わなかったんだ」

なんのこと？　と首を傾げて――オレをぐるぐる巻きにしたアレのことだと理解した。

ぐるぐる巻きにするつもりはなかったってこと？

うんまあ、打ち所が悪くてパーになってたら責任とらせるところだけど、結果オーライ。オレは百合さえどうにかなれば、細かいことはどうでもいい。

「いーよ、不法侵入とチャラってことで。それよかどうすんのさ、おにーさんのチカラ？　に馴染ませてって」

おにーさんは「チャラってどういう意味かな」、と今さら外人のように分からない単語に首を傾げたものの、とりあえず保留扱いにしたのか話を続けることにしたらしい。

「ん、こうするの。」

と言っておもむろに百合・成れの果て・残骸ズを庭に投げた。

んああ!?

バサバサリとその辺りに巻き散らかされる百合・省略。

ため、何しやがる！ 残骸とはいえ元はオレとイツキの小遣い：

…！

仰天するオレには構わず、おにーさんは瞳を緑に据えて、杖の先をその方向へ向ける。

再び燐光が、地面からわきいでる。

ザワリと空気が逆立つ感触にオレは息を飲んだ。

まるで早送りを見ているように。

百合が撒かれた辺りから新しい緑色がぐぐつと背を伸ばす。

あつという間に萌えて、ほころび、その頭にすんなりした白い蕾をつけ。

フワフワと漂う燐光が姿を消す頃には、一面、百合の海。

白く輝く花卉は瑞々しく開き、芳香を放って、月の光にその優美な姿を表していた――。

オレは馬鹿みたいにはかーと口を開け、その一部始終を見ていた。
「虫が入るよー」なんていう、おにーさんのツツコミによりパフンと閉じるまで。

「っお、おにーさ…」

「あ、ちよつとゴメンね」

アワアワと言葉を探すオレのお腹に腕を回し、おにーさんはイキナリ地面を蹴る。

は？

ぐんつと身体が重力に逆らい——気が付いた時には、2階のバルコニーに。

地面を見下ろす場所にいた。

「のわあああっ!？」

「しー。誰か来たよ」

人差し指で口を塞がれてハッとする。

確かに、ヒソヒソと誰かが囁きを交わす声が微かにして。カシャカシャンと車輪が回る音が庭先に近づいてくる。

——約束の時間だった。

「……イツキくん、やっぱり……」

「大丈夫……きっと咲いてるから……」

体力の消耗を抑えるために最近はず椅子移動を余儀なくされたユイカと、慣れたようにそれを押すイツキが姿を見せる。

ゆったりと微笑むおにーさんの足元にしゃがみ込み、オレは自分の口を両手で押さえて、気配を殺していた。

キュルリ、タイヤが軋んで止まる。

「……………!」

二人の目前に広がった白い花の乱舞。

さっきのオレと負けず劣らず間抜けに口を開けたイツキが、一瞬早く我に返る。

まあ当然か、オレ達の持ち金で用意できた花の量を遥かに越えるもんな。あとで追求されそうだな。

「ほら…ほら！ 咲いてるよ、お願いしよう？ きっと、百合も、ユイカの願いを叶えるために咲いてくれたんだよ！」

「……うそ…、季節外れなのに…こんな……」

そうだよユイカ。

お前のための百合だから。

叶わないはずがないんだ。

俺たち三人、それぞれの関係が変わったって、ずっと一緒なんだから——……

二人が、自然に手を組んで百合に祈るのに合わせてオレもその場所から祈る。

ユイカを助けて。

オレたちからユイカを取らないで。

手術が、成功しますように——。

「……君は、あれでよかったの？」

チラリチラリと庭を振り返りながら、二人が戻っていく。

オレは、祈り終わったユイカとイツキが見せた笑顔に、もう大丈夫だと確信した。

なんだかスッキリしたような、ポカンとした脱力感に身体を支配されて、ぼんやりしていると、ふいにおにーさんがそう言って。

「……………」

ぽやんとした目でおにーさんを見上げると、全部見透かしたよう
なやさしい瞳で、オレを見ていた。

……不覚にもときめいてしまう。

「君も、あの子を好きだったんでしょ？ 譲っちゃって良かったの」

……なんでわかったんだ。

マホーツカイだから？

「……いいんだ。オレだと、アイツはあんなふうに笑ったりしない
から。」

二人とも大事で、好きだから——ユイカが笑って、イツキが幸
せなら、たぶんオレも、幸せなんだ」

それに、無理矢理こっちを向かせるような情熱もないからね、と
笑うと、淡い苦笑が返ってくる。

やっぱり君、年相応に見えないよ、と。

まあ普通の小学生より老成しているのは自分も認めるところだ。
客観的にオノレを見つめないといけない環境に置かれているもんで
な。

イツキはしばらくオレを探して戻りつつもキョロキョロしていた
けど、結局バルコニーに身を潜めたオレたちには気付かず、背を向
けてから、拳をぐるぐる天に向けて振った。

見えないのは分かっているけど、オレもそれに答えて拳を突き上げ
た。

クスリ、とおにーさんが笑う。

――夜が東から明ける。

6. 冒険の終わり / 願い事は、

——願い事は、なあに？

家に帰るにはちよつと遠回りだけど、もう日課になっている坂の上のお屋敷を通る、帰宅ルートを今日も行く。

あいかわらず鬱蒼うつそうと茂る、屋敷を囲んだ木々の緑が見えて——あたしは目をすがめた。

「なにやってんの、お前ら」

「あつ 静紅ねーちゃん！」

「静紅さん」

「ねーちゃん！」

あたしが声をかけた途端、わらわらと寄ってくる我が弟及びその親友、プラス近所のちびっ子共は屋敷の塀にへばりつき、なにやら中を探っているようだった。

「オバケ屋敷探検？　なら夜中にやんなきゃつまんないよ？」

「そんな怖いことするかー！　羽根だよ羽根！　バドミントンしてたら中に入っちゃったの！」

「見えてるんですけど、ギリギリ届かなくて」

そこまで話し終わると、期待に満ち満ちた目があたしに集中して。

「……………」

キラキラキラキラ。

ちっ。

あたしは鞆をちびっ子どもに預け、柵に手をかける。
ったく、スカートだっつうのに。

「お前ら、周り見張っとけよ。よそん家なんか侵入してんの見られたら高峰さんちの静紅さんの評判が悪くなるからな」

「らじゃーですオヤビン！」

「今さらだと思いますが」

両者ともあとでお仕置き。

柵を握った手に力を入れて、あたしは地面を蹴りあげた。

——魔法の夜のあと。

おにーさんはしばらく屋敷に滞在すると言った。

とある人からの連絡を待っているんだと。

だから、お礼ってわけでもないけど——オレは頼まれもしないの

に、おにーさんの世話を焼くことにしたんだ。

なにしろ自称異世界人（半分）。

ここでの生活常識がまるでない彼に、食べるものを差し入れしたり、一緒に屋敷の部屋を片付けたり、オレはほとんど毎日坂の上の屋敷に通っていた。

「ユイカ、予定より早く退院できそうなんだって」

ホコリだらけになっていたリビングのテーブルは、おにーさんとオレがこしばらくせっせと働いた結果、ツヤピカになってもとの姿を取り戻していた。

オレは頬杖をつきながらおにーさんに報告する。

よかったね、と微笑む彼の笑顔に、アイツの時とは違う鼓動を覚えてつつ。

ナイショだけどさ。

不毛だなく、絶対おにーさんオレのこと弟扱いしてるもんな、まあまだコドモだししょーがないけど。

せめて、彼がずつとしている勘違いを正す方法はないものか。

……アレしかないか。

アレかやっぱり。

よし。

拳を握って雄々しく立ち上がったオレを、不思議そうにおにーさんは見る。

作戦を決行したあとのおにーさんのビビる顔を思い浮かべ、ニヤ

りと笑うと、彼は僅かに身を引いた。失礼な。

「なあに？　なんだか悪巧みしてるような顔だよ」

「失敬な。ナンニモカンガエテませんよう。じゃあオレ、見舞いにいくから」

「ユイカちゃんたちによろしくね」

また明日、と手を振って別れる。

明日。おにーさんに会ったら、どんな反応するだろう。

ぶったまげるかな、困るかな、何で言わないの、って呆れたあと――微笑ってくれる、よね？

「わっ」

「おっと」

妄想しながら坂を駆け下りていたオレは、前をよく見ていなかったため誰かにぶつかってしまった。

イキオイ、後ろにひっくり返りそうになるのをぶつかった人が支えてくれる。

「ごめんなさいっ」

「大丈夫？　危ないから前見なきゃダメだよ」

笑みを含んだ柔らかい声に顔を上げて、オレは顔を赤くする。ぶつかったのは超美人な男のひとだった。

「サツキ、行くぞう」

連れらしきおっちゃんが彼に声を掛けて、もう一度オレに気をつ

けてね、と微笑んでからそちらへ足を向ける。
オレは慌てて頭を下げて、坂を上っていく二人を何となく見ていた。

「…せっかち…ライさん…」

「…よ、…日もかかったんだから…、待って…」

途切れ途切れに聞こえる声は楽しげで。ぶつかった男のひとは、少し印象がおにーさんに似てるな、と思ったりした。いや、あの人がずっと年上みたいだから、おにーさんが似てるのか、とも。

この先には、お屋敷しかないのにどこに行くんだろ。

——そう思ったとき、どうして引き返さなかったんだろうと、オレは翌日後悔することになる。

呼吸を整えた。

ユイカに暗い顔を見せるわけにはいかない。
ぎゅっと拳を握って、深呼吸したあと——笑顔を作る。

「しいちゃんカワイイ！　どうしたのっ」

病室を覗いたオレを発見して、ユイカが歓声を上げた。
オレは気恥ずかしい気分で、部屋に入り、見舞い品であるプリンを渡す。

「たまにはな。つか、衣替えしてたら着るもんが無くなったんだよ」

「話し方がいただけないわー。んーん、でもカワイイっ。もつとそういう格好すればいいのに」

冗談、動きにくいし。と顔をしかめてから、ユイカにべったりくっついていないはずのイツキの姿を探した。

ユイカの手術が成功して。一般病棟に移ったとたん、イツキはコバンザメのようにユイカから離れなくなったのだ。

目を離したら、消えてしまうかとも言うように。

ま、気持ちはわかるけど。

あの野郎、カッコつけてたのはユイカの手術が始まる前までだったからな。

手術が始まってからメソメソメソ終わるまでウジウジしやがって。これだから男はイザってときに頼りにならないつつうんだ。

「イツキくんは売店だよ。お茶買ってきてもらってるの。ちょうど良かった、持ってきてくれたプリン食べようよ。しいちゃんの手作りだよねっ」

まだベッドから離れられないユイカは、それでも頬を薔薇色にして、笑っていた。

だから。

あれは夢じゃないんだ。

「ユイカ、お待たせ……うおっ」

緩んだバカ面で戻ってきたイツキが人を見るなり声を上げる。

「……なんだよ、めっずらしーカッコして」

「オレが女装してたら悪いか」

「女装じゃないでしょいいちゃん……」

イツキに向かって仁王立ちしていたオレは、呆れたように言うユイカを振り返る。

フワリとひるがえる膝丈のスカート。

いつも洗いざらし、手ぐしで撫で付けるだけのショートヘアはといてピンで止めて。

いつの間にか両親がクローゼットに仕込んでいる乙女チックなワンプリース、普段着ないそれを選んだのは、色が気に入ったからだ。藍色で、フチに黒いリボンで飾りがしてあるやつ。

我ながら美少女。

なのにさ。

うろんな目付きでオレを上から下まで眺めて、イツキがため息をつく。

「シズクもなー、そういうカッコしてたら、わりとイケてんのに」
「気色悪イこと言ってんなよ。てめーはユイカにデレデレしてろ」

お決まりのやり取りに、くすくすユイカは笑い出す。

そんなユイカを幸せそうに、目を細めてイツキは見つめた。

もう胸は痛まない。

いま、痛いのは、別の理由なんだよ、おにーさん。

ひらひらと心もとないこんな恥ずかしい格好したのは、見せたか

ったからなのに。

オレを完全に男だと勘違いしてるおにーさんに、バーカ違うよって言いたかったのに。

ユイカと、イツキと、笑いながらオレはポケットにいれた『夢の証拠』をぎゅっと握りしめた。

――数時間前。

ユイカの見舞いに行く前の日課になっている、坂の上のお屋敷訪問にいつも通り向かって。

「……え……？」

しっかりと錠の掛けられた鉄門に、オレは茫然と立ちすくんだ。

なんで、鍵？

なんで、閉められてんの？

「っ……………！」

直感的にその理由を悟ったオレは、動きにくい格好にも構わず柵に手を掛けあの夜のように門を飛び越えた。

――まるで、ここ数日のことが夢だったように。

閉じられた屋敷は誰の気配も感じられず、なんの痕跡も見つからなかった。

……また明日、って言ったのに。
帰っちゃったのかよ。

誰かからの連絡があったんだろうか。
もう、ここでの用事は済んだんだろうか。

何にも言わないでヒドインじゃねえの、そりゃオレはおにーさんの何でもないけど……、

ふらりふらりと足を進めて。

オレは昨日まで百合が咲いていたはずの庭先へたどり着く。

なんにもなかった。

もとの通り、草木が繁った、ジャングルみたいになった庭。

昨日まで、季節外れに咲き誇っていた白い花など、全く見当たらない。

本当に、夢、だったみたいに。

「徹底しすぎ……」

こしこし目を擦りながら、現れたときと同じように突然消えた魔法使いに文句を言う。

サヨナラくらい言ったって。

「……」?

フワッと鼻先をかすめた芳香にオレは顔を上げる。

キヨロリと見回して——それを見つけた。

ぽつりと。

一輪だけ、蕾をつけた百合が、伸び放題の草に紛れてそこにあった。

まるで何かに誘われるように、それに近付き、手を触れた、瞬間。パアッと光を放って、百合はその蕾を開き――消えた。

そして、オレの手には、小さな銀色のわっかと、一枚の紙。

――挨拶もしないで、ごめんね。

――お世話になりました。

――お礼がわりに、君に魔法をひとつ置いて行きます。

――君自身の願い事が叶いますように。

――――坂崎 蓮

百合の装飾がなされた幅広のリング。
綺麗な日本語で書かれた、短い手紙。

オレに、残されたメッセージ。

「……おにーさん、意外と硬い名前……」

――君自身の願い事が叶いますように――

オレの、願い事。
それは。

——願い事は、なあに？

「ほら。気ィつけろよ」

屋敷に生えている木の枝に引っかかっていた羽根を取って、下で救出活動を見守っていたガキ共に投げ渡す。

「さんきゅーねーちゃんっ」

ワラワラと微妙に位置を変えて再び遊び始めた弟たちに手を振って、あたしはそのまま木の上で休憩としゃれこむ。

首にかけて鎖に通したリングを、指先でつまんで眺めた。

——君自身の願い事が叶いますように——なんて。

「へボ魔法使い。ちっとも叶わないじゃないかよ」

あれから六年たっても消えることのないラピスラズリの面影に、あたしは悪態をついてリングを弾いた。

キン、と涼やかな音を立てて西日に煌めく。

あの、魔法の夜から。

あたしの――オレの、願い事は、ひとつだけだっていうのに。

ふっと視界の端に、あの夜の燐光が過った気がして瞬きする――と。

ドン、と突然の弾けるような圧力と目が眩む白い光が、あたしの背後に生まれる。

時が止まった。

強く、心の奥を叩くものにあたしの全ては支配されて、ただ、茫然と――後ろを振り返る。

「……ゲホッ、くそ、座標がずれた…時間軸の計算式を忘れてたな……」

ホコリを振り払いながら、ガラス戸を開けて、庭へ現れる背の高い人影。

身にまとうローブ。

長い杖。

藍色のウェーブがかかった黒髪はあのときより長く。

視線を感じたのか、ふと顔を上げて、木の枝に座るオレと、目が合う。

「……やあ、そんなところで何してるの？」

微笑むラピスズリ。

——願う事は——もう一度。

坂の上のお屋敷には、魔法使いが住んでいる。

それは、

あたしだけの、秘密——。

Chapter. 0 fin.

6. 冒険の終わり / 願う事は、（後書き）

ここまでお読みいただき有難うございました！

く坂の上の魔法使いくプロローグ篇終了でございます。

……ええ、ここまですがプロローグ。

このあとはガラリと雰囲気を変えた女子高生静紅くシズクくと変な魔法使い蓮くレンくのラブコメファンタジーが始まります。

今現在意味不明なもろの謎や伏線は、このあとのお話で語られるか、予定している時系列別シリーズく星の勇者・東の魔王くで語られるかと。

他の連載とサイト執筆と誠に亀な更新になりますが、ときどき暇潰しに覗いて頂ければと思います。

よろしければご感想お聞かせください！。

2009／06／01

1. 噂の男（前書き）

改めて、再スタートです！

……Chapter. 0の雰囲気をつぶ壊すお話の始まり始まり～
…。

1. 噂の男

――坂の上のお屋敷に、最近イケメンが住み出した――

それが、近頃あたしたちの間で注目の話題。

「今まで外国に住んでたんだって」

「ハーフ？ とか何とか」

「人を探してるらしいけど、一体どんな子なの――！」

「わざわざ探すだなんて、どんな関係なんだろう！」

はしゃぐように並べられるクラスメイトの発言の数々に、あたしはヘッ、と唇を歪める。

うちのクラスだけじゃない、よそのクラスでも、学年違いのクラスでも、きつとやり取りされている内容は変わらないだろう。

――この間、坂の上のお屋敷に引っ越してきたイケメンが、とある女の子を探している。

肩くらいのストレートの茶髪、ドングリ眼、背の高さは160センチくらい、小鹿のような印象、

そして、うちの――私立渡里川学園女子高等部の制服を着ている、少女を。

なんだ小鹿って。オレはバンビか。

どこにでも居そうな、その謎の少女探しをしているみんなを眺めながら、あたしはこっそりため息をつく。

チラリ、と門の辺りに目をやる。

今日はまだ来ていないようだ。

――『あの日』の翌日。まだ混乱する頭を抱えて登校したあたしは、放課後どのような行動を取るべきか悩みに悩んでいた。

あの日――幼い頃、出会った彼と、再会したその時。

気がつけば何か言い掛けていた彼を蹴っ飛ばしてダッシュで逃げている自分がいた。

……何で逃げる。

あれだけ待ち望んだ再会なのに、いざ、本人が目の前に現れたら逃げるってどうなんだ、オレ。

いつものように、坂の上の屋敷を経由して帰るべきか。

もうちょっと冷静になって、気持ちを整頓してから会うべきか。

だって、どうして逃げたの、って言われたら、答えられないし。
また会えて嬉しい、でも、でも、

とホームルームも終わった教室に残り、自問自答していたのだが、突然、窓際にいたクラスメイトたちがキャアキャア騒ぎ出して、あたしは顔を上げた。

「いやー！ 誰あれ！ なに、誰かのお迎え？！」

「ちょ、めっちゃくちや美形じゃないっ」

「ええーよく見えないー」

「あ、先輩たち話しかけたよ！」

「あたしらも行ってみる？」

上気した顔でミーハーに騒ぎ立てている内容を聞いていると、どうも門の辺りに男がいるらしい。

うちは女子高だから、わりとよくあるんだよな、彼氏のお迎え。

彼女が出てくるまででありとあらゆる女子の目に晒されるっていうのに、スゲー度胸だなんて思うんだけど。

あれはオンナの見栄もあると思う。

はあ、気の毒な野郎だ……、とすっかり思考を逸らされ、諦めて帰ろうと立ち上がったとき。

それが耳に入ってきた。

「長髪なんて、芸能人みたいよねー。カラーリングでもしてるのかしら、珍しい髪色」

「青っぽい……？ 背も高いしスタイルいいし、もしかしてそうかも」

……………長髪。

青っぽい髪色。

背の高い、美形。

さっきのさっきまで、そいつのことを考えていたためか、該当する人物の姿が浮かぶ。

ラピスラズリの瞳が、驚いたように見開かれて、微笑んだ、あの姿を。

「てか、すごい人ばかりになってるよ。やっぱ行ってみよ」

「みんなで渡ればこわくないー、って？」

「静紅ちゃんは行かない？」

キャツキャとはしゃいで誘われた言葉に、あたしは「用事があるから、」と作り笑いを返すので精一杯だった。

みんなが教室を出ていくのをニコニコ見送って。

自分一人になった瞬間、窓に張り付いた。

校門の前には、確かにオイオイってなくらい、人だかりができていて。女子校って怖え。

ではなく。

「っ……！」

なん で い る ツ ツ ！！

うちの生徒が回りを取り囲んでいる、その中心に。

あたしの悩みの原因である、彼、幼い頃の呼び名でいうならおにーさん、正しい名前を呼ぶなら坂崎蓮、

ラピスラズリの坂の上の魔法使いが、女の子の津波にも平然とした態度で、微笑みを保ったまま、そこにいた――。

2. 探され者

「斬新なところからの登下校なんだね、――しずく、ちゃん？」

塀に乗り上げた姿勢であたしは固まった。

人の悪い笑みを浮かべて見上げる、ラピスラズリ。

あたしを捜して学校にまで現れていた、おにーさんから逃げ続けて一週間目のことだった。

再会の、翌日。皆が騒いでいた門前の男前、まさかと思ったらやっぱりにーさんだった。

肉食獣である女子たちに囲まれて、怯みもしないあの神経が信じられない。

ってゆか、なんでここがわかったんだ、変態！ ヤベエ、蹴り食らわせた仕返しに来られたかつ？！

いやいやいや、あたしを探しに来たとは限らないし――……異世界人が女子校に何の用だよ。

“こっち”の世界に知り合いなどいないはずの彼が、ここに来ている理由など他に思いつかない。

窓に手をついたまま、ガクリと項垂れていると、パタパタ軽い足音がして、静紅ちゃん、とよく知る声。

幼なじみの少女が教室に飛び込んできた。

「静紅ちゃん静紅ちゃん、あの校門前のひと、静紅ちゃんの知りあ
いっ、でしょっ？」

「走んなよユイカ。てか、なんで……」

言葉遣い、と注意してから、何故か握りコブシなユイカは一気に
話し出す。

「だって、あの人が捜してるの、肩くらいのストレートの茶髪、ド
ングリ眼、背の高さは160センチくらい、小鹿のようにすばしこ
い、でもって、この制服を着ている女の子だよ？ 聞いたとたんピ
ーンと来たもん！ それっていいちゃんのことでしょっ」

やっぱりオレに用か……と遠い目になりつつ、一応、否定してみ
る。

「そんなどこにでもいるようなオンナなんかオレって決まったわけ
じゃないだろ……」

「言葉づかいー。もうひとつ！ 坂の上のオバケ屋敷に侵入するよ
うな子、って、あそこを通路道にしてるしいちゃんしくないじゃ
ない！ ねえねえどういう関係ー？ あんな王子様みたいなひとと
どこで知り合ったのー！ しいちゃんてば水くさいっ！」

あれは王子様でなくて魔法使いさんだ。

と、言っても信じてもらえないことを小さく呟く。

やっぱりオレに用かよー。

ってか、オレに気付いたのか？ あのときの少年だって、わかっ
た？

でも、何で今頃現れたんだ。

——オレが、願い事したから？

もしやファンタジーでよくある召喚とかいうヤツか！ それで召喚主を捜してるっ？ ……いや、おにーさんは魔法使い、自分で帰れるじゃん。

じゃあ何で。

何度目かの Why？ を頭の中で繰り返していると、あたしが胸元で握った物をユイカはじっと見つめて。

「——うんわかった。その指輪に関係ある人なんだね？ でもって、しいちゃんは何で見つかりたくない。……むー、仕方ない。ユイカは静紅ちゃんの意味を尊重します！」

何も言わないうちに納得して、覗き込むようにあたしに額を寄せ最後に訊ねる。「でも、いいの？」と。

さすが幼なじみ。あたしの迷いを読んだように、心を探ってくる。それから目を逸らして、頷いた。

ちよつと整理が必要なのだ。

おにーさんが何故現れたのか、何故あたしを探しているのか。

そして、あたしはどうしたいのか。

ずっと願っていた再会なのに、なんでこうなるんだ……？

逃げ続けて、一週間。

そろそろ身バレするかな、と思い始めた。あたしをよく知る同級生からも、それとなく自分じゃないの？ と訊ねられたし。腹をくくって出頭するしかないか……。

とは思うものの。

やっぱり今日も現れたおにーさんから隠れるように、あたしは校舎裏に回り、なるべく人目につかない箇所で塀に手をかけた。

正門はおにーさんおよび取り巻きの女子たちの包囲網が引かれてるし、裏門は閉められている。

いささかハシタナイがこっから出るしかないんだよ。

鞆を背負い、近くの樹を足場にして塀の上に移る。

はあヤレヤレ身が軽くて助かった。先生たちに見つかったら説教反省文のフルコースなため、とつと飛び降りるべく地面に目を移す――と。

塀に背中を預け、こちらを軽く見上げる男と、目が、合ってしまった。

な　　ん　　で。

硬直するあたしに構わず、ニツコリ微笑むラピスラズリ。

「斬新なところからの登下校なんだね、――しずく、ちゃん？」

おにーさんは、そう言って、受け止めるようにあたしに手を伸ば

した。

3. おにーさんとあたし

シズクちゃん、と確かにおにーさんはあたしの名を呼んだ。

彼に、一度たりとも自身の名を告げた覚えはない。

六年前も、現在も（いやそもそもそんなヒマなかったって）。

——でも、おにーさんならどうにかして知ることには出来るんじゃないか、とオレは推測する。

まほーつかいだし。

異世界から来たヒト、だし。

何でもアリなんじゃないかって。

いつまでも塀の上で睨み合ってるのもなんだ、と思ったのか、おにーさんは促すように紳士的に手をこちらへ差し伸べた。

……両手を広げて、僕の腕に飛び込んでおいで☆ とか？

やなこったい。

身を返したあたしは、おにーさんのいるところを避けて、ひらりと地面に降り立つ。

つまんなそうにちょっと首をかしげたあと、彼はおもむろに広げていた両手であたしの手を掴んだ。

いきなりのセクハラに眉をひそめ、口を開く——、

「逃げちゃうと名前を呼びながら追いかけてちゃうよ？」

ずーたいのデカイ男のくせに、可愛らしく首を傾げてそんなことを。

クソ、叫んでその隙に逃げてやろうと思ったのに。

「何の用デスカ」

そんなもの、蹴っ飛ばして逃げたあたしが言う事じゃないかもだけど。

連日待ち伏せしてまで捜されるほどでもないと思う。

おにーさんのこの様子じゃ、あたしがあの時の『少年』だって気付いているわけでもなさそうだし。

内心ドキドキ、表は不審者を見る目つきで眺めてやると、仄かに苦笑する。

「――とりあえず、どこかゆつくり出来るところで話さない？」

逃走防止に手をがちり握られ、名前も知られてしまった今となつては逃げても無駄。

諦めてあたしは頷いた。

「ごめんね、強引に。僕は坂崎蓮と言います。だいたい二十五歳」

名前なんか六年前から知ってるし。それに、何だよだいたいって。

そうツツコミたいところだが、今のオレ——あたしは、見知らぬ男に警戒中の女子高生を装っているの、じっと黙っておにーさんを睨みつけていた。

通学路からは少し離れた喫茶店。

うちの生徒が気軽に寄れるような店ではないので、ひとまず安心。目撃されて、おにーさんが捜していたのがあたしだなんてバレたら、明日からどんな目にあうか。

向かいに座ったおにーさんは、あたしのキツツイまなざしにもめげず、というか楽しそうに微笑み、あくまでも害のない人物をアピールしている。

頭のとっぺんからつま先まであやしすぎるっちゅーの！

しかし今日のおにーさんは、ざっくりしたクリーム色のニットにブラックジーンズという出で立ちで、その髪と瞳の色がなければそこら辺にいるにーちゃんそのもの。

喫茶店の店長さんだって、こいつがあやしい魔法使いだなんて思うまい。

「タカミネシズクちゃん、だよ。お友達が教えてくれたんだ、僕の捜しているのは君じゃないかって。ついでに、逃走経路も」

クスリと笑んだおにーさんの発言にもう少しで怒鳴るところだった。

誰だ売りやがったのは——！！

って、あたしがあそこから出入りするのを知ってるの、一人しかないよ。

……ユ・イ・カ……。味方じゃなかったのかよ！

まあ時間の問題だと思ってたけどさ。

うち、そんな生徒数多いわけじゃないし。

むむむ、と唇を引き結んで黙っていると、ふっと目を細めたおにーさんが、心持ちこちらに身を寄せ、ささやいてくる。

「そうして君を見つけることが出来たけれど――、君から、ちゃんと、名前を聞きたいな……。その唇で、紡いだコトバを」

トリハダの立つ美声で。

とろけるような声音で。

訴えて、くる。

ひいっつ。ぞわってきたぞわって！

「た、高峰静紅！　これでいいデスカこんちくしょー！！」

背中からうなじまで逆毛に撫で上げられるような声から逃れようと、叩きつけるように名を告げ。

“それ”を与えられたおにーさんが、深く笑んだことに、ウカツにもあたしは気付かなかった。

4. オレとあたし

幼い時をほんの一瞬共に過ごした不思議な男の人を。

ずっと忘れられなくて、もう一度会いたくて、夢だと忘れてしまっても仕方のない魔法の時間を思い出にすることが出来なかったのは、証拠があったから。

おにーさんがくれた、願い事を叶える、指輪が。

「――しずくちゃんは、よくあの屋敷に来ていたの？」

そう微笑みながら言われた言葉にドッキリする。

ええまあ。言わば、毎日。

誰かさんがまたやって来ないかしらと乙女のように待ち続けてましたよー、と考えて、自分の行動の寒さに改めて身震いする。

ぎゃーイタイッ！　なんて痛い子なんだオレは！！

頭を抱えて転がり回りたい気持ちを抑え、視線をさ迷わせた。手の中で無意味にティーカップを回す。

「ええーと、まあ、散歩がてら健康のためにとか？」

挙動不審なあたしを追及することなくおにーさんはふうん、と呟いて――「変だなあ」と首をかしげた。

何がだよ変と言いやあ最大級に変なのはアンタだ。

あたしのウロンな目付きに気づいているやらないやら、顎に手をあて考える人のポーズ。

「あの家には人避けがしてあってね――誰も、中に入れるはずはないんだよ」

「へ？」

あたしは素でキョトンとする。

人避けがどんなものか知らないけど、だって、今までもフツツーに出入りしてたよ？

お家の中に入るのはさすがに出来なかったけど、適当に草刈りしたり、植物の手入れしたり勝手にしてたけども。

「何も今までおかしな目に遇わなかった？ あの家に近いって」

「いやべつに……」

おかしな目についてどんなおかしな目だ。

そういや、あんな空き家、素行の悪い奴等の溜まり場になってもおかしくないのに、オバケ屋敷だっつー噂だけでなんにもなかった

のは——今更ながら変だよね？

あそこに出入りするあたしをガキ共が勇者を見る目で見つめていたのはそのせいかな。

小さい頃にあった“お願い百合”の噂も、いつの間にか消えていた。

あたしとしては、おにーさんとの思い出があるあの場所に他人が入り込むことを良しとしなかったのだ、それは歓迎ものだったけど。よくよく考えたら、それはあの魔法の日が過ぎたあとのことだ。

じゃあ、おにーさんが自分の世界に戻っちゃう前に、魔法で何かしていったの？

でも、それがあたしには通じてなくて——不思議に思ったおにーさんはあたしを捜して、この状況かつ！

「君を捜そうとして術を使っても、何かに弾かれるようで上手く働かなかったんだよね……、まだこちらの世界に魔力が馴染チカラんでないせいかと思っていたけど——」

なにやらアヤシイことを呟いた彼は、アメシストの瞳を眇め、じつとこちらを探るように見つめてくる。

い、居心地悪う。

全てを見透そうとする魔法使いの視線から逃れるために、あたしは話題転換を試みた。

「あのう、つかぬことをお伺いしますけど。なんであたしの通っている学校がわかったの？」

「うん？ ——ああ、街をプラプラしてるときに、同じ格好の……」

制服、だっけ？ それを着ている子を見て、訊ねたんだよ」

あたしはその答えに内心舌打ちする。

うちの制服は、カットソータイプブラウスにグリーンを基調にしたチェックのノースリーブワンピースを合わせるちょっと変わったもの。

くそう、なんでありきたりのブレザーやセーラーじゃなかったんだ！

ユイカにお願いされてエスカレーター式に高校に上がったことを、遡って子どもの頃、母校だからという理由で渡里川学園に突っ込んだ母を恨む。ええ逆ギレの逆恨みですよ。

「じゃあ、僕からも質問。しずくちゃん、僕が“普通じゃない”ことに驚かないのはどうしてかな？」

こちらには、僕のような者はいないと聞いていたんだけれどね？
柔らかに微笑んだおにーさんが何を言いたいのか承知の上で、あたしは空っぽボけた。

なにがですか、あ、外人さんてことですか、それともダラダラした髪の毛のことですか、そりゃ珍しいですけどいなくてわけじゃあ、

「僕が洩らした魔術のことも、世界のことも、疑問に思うそぶりもなかったよね？ 第一、僕が何も無いところから現れたのも見ていたはずなのに――」

全く、言及しないのはどうしてかな？ そう続けたおにーさんは

目が笑ってなかった。

今までの軽い態度を引っ込めた彼は、言い逃れは許さないとばかりに強い気圧されるような眼差しをあたしに向ける。

「君は、何者？」

いやいやいや、ただのオレっ娘な女子高校生です！

5. ハメられたあたし

じい、と観察してくるおにーさんの目から逃れるように視線をよそにやる。

――何者？　ってアンタ知ってるハズだろう、オレが誰なのか。あまりの気付かれなさにイラッときて、ああそうかとわかってしまった。

あたしが、おにーさんから逃げていた理由。

――気付いて欲しかったんだ。

あたしのほうから、あの子だと言って言うんじゃないくて、あの子の子だったのか、っておにーさんのほうから先に気付いて欲しかったんだ。

それがこのアホ、見当違いなことばかり――

自分の目が据わってくるのがわかった。苛立たしい気持ちのまま、かしこまって座ったいた姿勢をだらりと伸ばし、でえー？　と小娘めいた声を出した。

「坂崎さんのオハナシってそれだけですかー。そんなムツカシ気なことといわれてもアタシ知らないしー。なんかのカン違いとかあ？　こっちは職業不定無職のおにーさんと違って忙しい学生の身なんですよおー。帰っていいデスカー」

なんつって、バイトもしてないし暇なんだがな。そんなことはおにーさんにはわかるまい。

やる気の失せたアタシの言葉におにーさんは目を瞬かせる。凝視の圧力がなくなつて密かにホッと息をついた。

「もう用ないよねー。別におにーさんが怪しい異世界人だろうとまほー使いだろーとただの怪しい人だろうと関係ないし。あ、言いふらすとか心配しなくても大丈夫ですよー？　言ってもどうせ誰も信じないし、あたしにメリットがあるわけじゃないし、触れ回る意味ないよね。」

というわけでもう校門前でのストーキング活動やめてね。そのうち先生に警察に通報されるよ」

言つてて気付いた。

今まで注意されてないのが不思議だよ。眉をひそめてあたしが疑いのまなざしを向けると、お兄さんはニッコリ笑う。

なんだ その アヤ し すぎる 笑み は 。

なんかしただろ、なんかしたな！！

この魔法使いめ、自由気ままに振る舞いやがって……！

「――僕の力が君に及ばないというのが気になるんだ。潜在魔力があるのか……それともこっちの人間だから――いや、それは他に効いていることの説明がつかないか……東の賢者イーザ・レーンの名が廃る……」

廃れる。良くわかんないが。

てか今アヤシゲなこと言いやがったな？　何を効かせてるってんだ、何を。

今度はあたしがおにーさんを観察する番。

チクシヨウ美人だな、相変わらず。

思い出が美化されてるのかと思ってたけど、全然だ。実物のほうがもっと——凶悪だ。

問答無用で意識を引き付ける。

そこにいるだけで、空気が変わる。

芸能人や、人に見られることを生業とする人たちとはまた違う、存在感。

……世界が違う。

——文字通り、そういう存在だったと今さらながらに思い出して、あたしはハッとした。

あの幼い日。突然現れて、突然去ってしまった、彼。

今回は？

いつまでこっちにいるの。何故ここに来たの。また、突然いなくなるの——？

おにーさんに対して持っていた、一方的な憤りはその瞬間消えた。

もう、待ち続けるのはイヤだ。

今度は、願い事の魔法だって、ない。

追いかけることも出来ないのに、あたしの本当を知らないまま、帰ってしまうなんて——ダメ。

キッと顎を上げておにーさんを見据える。

だけど、あたしが声を発するより先に、彼の方が口を開いた。

「君のその瞳。危険だなあ……、魔力もないのに僕を囚えようとするなんて、——放っておけないな……静紅ちゃん、——」

決して大きくはないその声に、眩暈を覚えて。
ふつり、意識が、断絶する。

何事かを述べる彼の唇が開閉するのを見ながら、それが頭に入ってくることはなく。

だけど彼が問い、こちらに何か確認して、それにあたしが頷きを返したことだけ、頭に残る。

「——ね？　じゃあこれで、約は結ばれた」

ぱちんと眉間で何かが弾け、今まさに夢から覚めた気分であたしは瞬きを繰り返した。

呆然として、彼を見つめる。

——今。

「なにをした」

「ほら、やっぱり見所がある。本来なら操作されたことにも気付かないままなのに——ずっと真名で縛っておく訳には行かないからねえ」

オレの殺気を込めた視線など、虫に刺された程も感じていない様子で、魔法使いは満足げに笑った。

「なにをしゃがった、と聞いている」

目の前の男が長年の片思いの相手だろうと、ユイカの恩人だろうと関係ない。

ことと次第によってはテーブル蹴倒してぶん殴るくらいのことはしてやる、と決意して、もう一度問う。
返ってきたのは、楽しげな笑み。

「そんな大仰なことじゃないよ。ちよっとした、誓約」

君の力が僕の力を上回るか、誓約を破棄する方法を見つけるかするまで、

「これより君は、この僕の――東の賢者イーザ・レーンレンギル・アリストの弟子、魔術師見習い静紅だ」

……なにがどうしてそうなる……!!

して当然のあたしの叫びは、「僕のことはお師匠さまって呼んでね。あ、師匠の命は絶対だから」というご機嫌にアホっぽいおにーさんの発言に流された。

高峰静紅、十七歳。

本日より、マホー使いの弟子、就任………？

C
h
a
p
t
e
r.
1

e
n
d.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0318h/>

kaleidoscope×landscape ～坂の上の魔法使い～

2011年10月5日16時08分発行